高崎経済大学論集　第49巻　第３・４合併号　2007　213頁～214頁

退職記念講演会（講演抄録）

大学とは何だろうか

Thinking of the university through the experiences at the University

講師　小　川　雅　敏

本日は、本学に赴任してから２年半の間に発見したいろいろなことの中のいくつかをもとに話をしてみたい。

最初に発見したのは、「単位がほしい」。大学に来て初めてのある授業で、何故この授業をとろうと思ったのかと受講生に聞いてみた。私は役所、特殊法人、民間会社に勤めていたが、そこでは、国民が何を考えているか、企業や消費者がどういう意向を持っているかは、仕事をする上で知っておくべきいくつかの必要事項のうちの一つ。関心がどこにあるかが分かれば、仕事がしやすいし話がしやすいと思ったから。何に関心があるのかを聞いたつもりだったのだが、返ってきたこたえは、「単位がほしい」から。

確かに単位は大事。必要な単位がとれないと卒業できない。しかし、しっかり勉強して試験で一定以上の点数が取れれば単位は取れるのではないか。逆に、単位が取れればそれでよいというわけではない。成績や単位を裏付ける一定の「実力」がないといけない。一定の実力が身についたと判断されたから、一定の成績がつけられ単位が与えられるのではないか。成績や単位は実力の証明書。また、単位をとっても実力の裏付けが無ければ意味がない。大学を出て会社へ入っても通用しない。

私がアメリカのある大学院で勉強をしていたときのこと。毎年、学位試験の合格者の名前が掲示板に張り出される。それを見ると、合格者の数が意外に少ない。そこで、何故少ないのか副学長に聞いてみた。すると、「少ない年もあれば多い年もある。今年はたまたま学校の基準に照らして基準以上の成績の人が少なかっただけ。」と言う。彼は続けて、「この学校で学位をとった人はどういう人であるかを社会は知っている。この学校で学位をとった人はどのくらいできる人であるかを会社は知っている。この学校の学位は会社が人を採用するときの一つの基準になっている。この学校で学位をとったのだからということで、会社は一定の安心をしてこの学校の学生を採用している。基準を変えると混乱が生じる。したがって、基準を変えるつもりはない。」と言う。

勉強は大変で、とくに、毎週、１科目の授業につき５～６冊の書物を読んでいかなければならないリーディング・アサインメントは大変だった。学期中は、休みは日曜日の午前中と午後３時くらいまで。しかし、非常によい勉強になり、自分で勉強したためか、今でも何を勉強したかをはっきりと覚えている。

日本では教育の終着駅は大学、これに対して、アメリカでは教育の終着駅は大学院と言ってよさそう。したがって、日本では４年間勉強し、アメリカでは６年間以上勉強するということになる。

違いはこれだけではない。「国際学力テストをすると、アメリカの高校１～２年生は日本の中学生レベル」とか、「大学に入っても、１～２年の勉強内容は日本の高校レベル」などとよく言われる。このころまでは、日本のレベルの方がアメリカのレベルよりも高そう。しかし、年齢が20代終わり頃から30代の人では、例えば、金融のノウハウやスキルなどを持っている人は、日本人よりもアメリカ人の方が多そう。レベルも高いよう。

こうした「逆転」が生じるのは、大学に入った後の違いにあると言われている。日本では、大学に入った後、進歩が止まったりゆっくりしたりしてしまう。しかし、アメリカでは、大学に入ってから、進歩が大きく加速する。

と言って、大学に入ってすぐに専門分野を猛勉強するということではないよう。高校を出たばかりの若者に自分のやりたいことや自分の適性が分かるはずがないと考えられているよう。そこで、１～２年のうちは広く勉強をして、大学を卒業して社会に出てから自分がすること、それを探す期間、すなわち「自分探し」の期間と位置づけられているよう。見つけた後、３～４年と専門分野の勉強を一生懸命にするよう。世の中の進化とともに、３～４年の２年間勉強しただけでは必要とされる力を十分身につけられない専門分野が増えているよう。そこで、大学院へ行ってさらに猛勉強する。

アメリカの大学は時代の変化とともに変化してきた。日本の大学も変化を求められるようになっている。すでに、いくつかの大学では変化を始めている。１つの視点は、グローバル化が進む中で国際競争に直面しているのは、企業だけでなく、人もという点。したがって、専門分野の勉強と並行して、とくに外国語、IT、ルールを学ぶことも大事。

二番目の発見は、授業を休んだり授業に遅れてくる人が意外に多いこと。「自由」を勘違いしている可能性。欠勤や遅刻は会社では通用しない。悪い習慣や癖は身につけないように。簡単には直らないのだから。

また、「実力」だけでは不十分。「人柄」や「体力」も重要。大学は最高の学問の府。最高の学問の府で学んだ人は、会社で評価されるだけでなく、社会でも評価されることが重要。要すれば、「人格者」になること。

本学が、数多くのこうした人たちが輩出されるのを促進する場として、ますます効果的に機能することを希望して、話を終えることとしたい。

平成19年１月17日　於　附属図書館ホール